

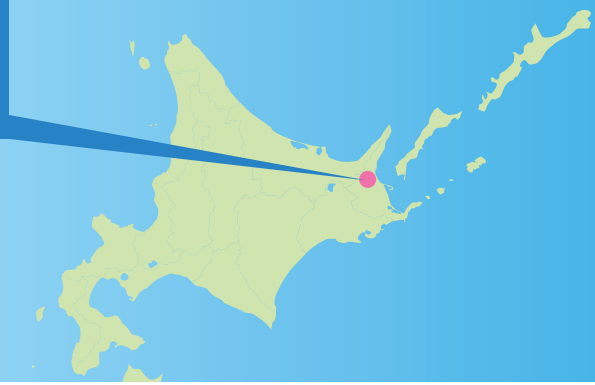
4. 地域資源を活用した新たな取組

- 1 標津町（北海道）
- 2 旧三国街道須川宿堰「たくみの里」（群馬県）
- 3 むれ源平石あかりロード（香川県）
- 4 久留米（福岡県）
- 5 小坂鉱山・康楽館（秋田県）
- 6 出雲國神仏霊場（島根県・鳥取県）
- 7 ハットウ・オンパク（大分県）
- 8 長崎さるく（長崎県）



標津町

【しべつちょう】



- 地域資源＝鮭の商品価値を高めるとともに観光資源として活用する
- 観光を通じた鮭を取り巻く関係者の連携



標津町の観光資源「鮭」

取組概要

町の宝「鮭」の品質管理とこれを活かした体験観光

昭和57年頃、町内を流れる薫別川に大量の鮭が遡上する映像がTVに流れ、多くの観光客が訪れたことから町民は鮭で人を呼べることを認識し、町も鮭に関する施策を重点に据えた。ところが、平成10年近隣町で製造したイクラ醤油漬けから病原性大腸菌O-157が検出され、町の主要産品である鮭が風評被害を受けた。町の宝を守るため衛生管理と安全対策を地域で取組むことを決め、平成12年「標津町地域HACCP（ハサップ）」を導入した。同年、安全な鮭をPRしたい漁業者、新たな観光客を誘致したい観光業者、鮭によるまちづくりを進めたい町の3者が協働し、鮭の網おこしから荷捌き、加工、鮭メニューの食事までの生産過程を体験するモニターツアーを実施し、その後も連携した体験観光の取組が続けられている。

※HACCPとは、Hazard Analysis Critical Control Point（危害分析・重要管理点）の略で、食品の製造工程で危害を及ぼす要因を分析し、重要な管理点を連続的に監視することによって安全を確保する管理手法のこと。

■これまでの経緯

- 平成12年 ・ 標津町地域HACCP導入
- ・ 地域ハサップ体験、モニターツアーを実施 約100名（計5回）が参加。実施後、漁業者に鮭の安全性や商品価値をPRする機会となり、観光業者にとっては早朝の網おこし時間に合わせて前泊するなどの効果が生まれた。また、漁業者は観光客を鮭を買ってくれる消費者と捉え、体験ツアーを通じて品質を訴えることも漁業生産活動であるという意識の変化が生まれた
 - ・ 観光関係者による地域資源発掘のための標津再発見ツアーを実施
- 平成13年 ・ 地域住民を対象に観光体験ガイド養成基礎講習会を開始
- ・ 地域の資源を熟知したガイドが登録されている「標津町観光ガイド協議会」を設立
 - ・ 継続的なツアーの実施に向け、受入れ窓口となる「標津町エコ・ツーリズム交流推進協議会」が発足
 - ・ 観光に対する漁業者の意識改革活動となる意識醸成活動を開始
- 平成15年 ・ 宿泊施設のサービスレベルの準化を図るもてなしステップアップ活動を開始
- 平成18年 ・ 酪農業側の受入れ窓口となる「標津町グリーンツーリズムフレンズ」が発足
- ・ 全国オーライニッポン大賞（農林水産省）を受賞
- 平成19年 ・ 第1回大好きHOKKAIDO観光プラン大賞（北海道遺産推進協議会）を受賞
- ※標津町では、「標津町の豊かな自然環境と、鮭日本一の根室海峡を漁場とする元気な漁業や知床山系の裾野に広がるミルクの里の酪農群との連携により、萌える海と大地さわやかな交流郷・標津町ならではの農業と歴史、生活や遊と食をテーマにした感動体験旅行」をエコ・ツーリズムと呼んでいる。



■統計データ

- エコツアー宿泊者数（約9割は教育旅行関連）
平成13年105人 平成14年634人 平成15年1,576人 平成16年1,328人 平成17年1,532人 平成18年994人 平成19年1,684人
- 修学旅行生受入れ校数
平成13年1校 平成14年3校 平成15年10校 平成16年10校 平成17年13校 平成18年11校 平成19年21校

🗨️ 地域づくりのノウハウ

- 課題** エコツアーに同行するガイドの不在・不足
- 解決策** 観光体験ガイド養成基礎講習会を毎年実施。現在は85名のガイドが登録されている。
- 課題** 観光に対する漁業者の理解
- 解決策** 「意識醸成活動」による啓蒙と情報提供。今では漁協定置網部会から、標津町エコ・ツーリズム交流促進協議会に寄付が寄せられる。
- 課題** 教育旅行マーケットに容易に参入できない
- 解決策** 着地型メニューによる他地域との差別化と、受入れにあたり町も積極的に関与することで学校に安心感を与えた。
- 課題** 教育旅行中心の受入れになり、一般客対応が今後の課題
- 解決策** 専門の受入れ組織立ち上げを検討中



お問い合わせ

標津町エコ・ツーリズム交流推進協議会
URL : <http://www.shibetsutown.jp/>

TEL : 0153-82-2131
FAX : 0153-82-3011

地域資源を活用した新たな取組

旧三国街道須川宿堰

「たくみの里」【きゅうみくにかいどうすかわじゆくぜき】
【たくみのさと】

- 地域の持つ潜在的な観光資源に着目した観光振興に伝統工芸技術を活用
- 地域住民の理解と協力を得ながら、観光客との交流・農村の保全を図る



多くの観光客で賑わう須川宿

取組概要

農村の持つ潜在的な観光資源に着目した「たくみの里」づくり

旧新治村では、基幹産業であった農業が、農業経営者の高齢化や後継者不足等から衰退しつつあったことから、三国街道の宿場町として発展した「須川宿」を中心に地域に点在する「野仏」などを探しながら田園地帯を散策する「野仏めぐり」を始めた。しかし、村に活力を取り戻すためには、村民の理解や協力と必要最低限の施設整備が必要であることを認識し、村で古くからある地域資源や堰などの社会資本の活用、伝統工芸などの技術を持った職人＝匠を活躍させる一体的な取組「たくみの里づくり」を始めた。

「たくみの里」は「須川宿」を中心にのどかな農村空間をステージとして都会からの来訪者と集落の人々との違和感なく交流・体験できるようにした施設で、合わせて、地域住民によって、農村風景の維持、保全等のため、美しく維持管理されている。

これまでの経緯

昭和53年	野仏を探しながら田園散策する「野仏めぐり」を開始し、都会からの観光客に好評。
昭和59年	「たくみの家」を中心にした「たくみの里」実施計画を策定し、最初は5軒で「たくみの里」がスタート。
平成2年3月	農村の原風景を保存するために「美しい新治の風景を守り育てる条例」を制定。
平成2年度	手づくり郷土賞（生活を支える自然の水）を受賞。それ以降も植栽や花飾り等宿堰の美化活動を地域住民により実施。
平成8年	旧三国街道須川宿堰が「歴史国道」の指定を受け、電柱移設や舗装の整備等を行い、魅力的な空間づくりと歴史・文化的な街なみづくりを実施した。
平成9年3月	「三国街道たくみの里」毎日地方自治大賞、最優秀賞受賞（毎日新聞社主催）
平成14年4月	「優秀観光地づくり賞」金賞・総務大臣賞（日本観光協会主催）
平成15年度	地域住民の有志により手づくり御輿（烏天狗御輿）が制作され、平成16年より豊楽祭りに使われるようになった。
平成16年6月25日	「たくみの里」により観光カリスマに河井進氏認定
平成17年8月10日	道の駅「たくみの里」登録
平成18年3月	NPO法人「たくみ会」設立。
平成19年度	手づくり郷土賞の「大賞部門」を受賞。



統計データ

○観光入込客数

昭和62年度 90千人 平成2年度 210千人 平成8年度 360千人 平成12年度 450千人 平成16年度 450千人
平成17年度 430千人 平成18年度 450千人 平成19年度 440千人

地域づくりのノウハウ

(事業開発時)

課題「野仏めぐり」「農作業をしている場で突然観光客に話かけられた」「農道に乗用車が入ってきた」等地域の人々側の不満や、「トイレがない」「休憩施設がない」等都会の観光客側の指摘があった。

解決策 不満や指摘を受けて、観光振興には美しい田園風景があるだけではだめで、村民の理解や協力と、必要最低限の施設整備が必要であることを確信した。

(事業展開時)

課題 たくみの里は約350haの須川平に開設しており、野仏めぐりコースは最長9キロメートルに及ぶ。コースやたくみの家などを誘導する案内看板が少なく苦情が寄せられた。看板類は民間施設でも多用しており、地域の景観づくりのためにもどのように看板類を整備するか課題であった。

解決策 野仏めぐりコースやたくみの家が案内できるよう、町が主体となって県の補助金「千客万来支援事業」を受け、地域の協力のもと案内標識を整備した。案内標識には民間施設も入れ看板類の集約と景観づくりが図れた。



お問い合わせ

みなかみ町役場観光商工課

TEL：0278-25-5017（ダイヤルイン）

URL：http://www.town.minakami.gunma.jp

むれ源平石あかりロード

【むれげんぺいしあかりろーど】

- 地域資源を活用した観光振興と地場産業の技術が融合
- あらゆる場面で地域住民の参画・参加が図られ、まちづくりに積極的に関与



幻想的な「むれ源平石あかりロード」(2006年ポスター写真)

取組概要

「源平合戦の史跡」と「庵治石」を融合させた灯籠祭りの開催

地域の資源である源平史跡間を楽しんで散策するために史跡と史跡を繋ぐ仕掛けができないかとの意見がきっかけとなり、『むれ源平石あかりロード』が検討され、地場産業である石材の加工技術を活かした『石あかり』で沿線を灯した史跡散策、石あかり散策を楽しんでもらう取組を開始した。

現在は地域を元気な街にするため地域住民が一体となって史跡の保存活動やボランティアガイド活動、道並みや駐車場の整備についての検討会、地域のガイドマップの作成などを行っている。

これまでの経緯

平成15年	地域づくりの準備会を立ち上げ
平成16年4月	牟礼町をもっと元気な町にするための「むれ源平まちづくり協議会」を発足
平成17年1～12月	NHK大河ドラマ「義経」で地域に脚光
8～10月	2005むれ源平石あかりロードを開催（第1回）※以降毎年開催
平成18年	活動主体を実行委員会制に移行
7月	地域づくり活動に対して国土交通省四国地方整備局長表彰を受賞
平成19年8月	石あかりロードを渡辺内閣府特命担当大臣が視察
10月	「むれ源平石あかりロード」が国土交通省の「日本風景街道」に登録
11月	地方自治法施行60周年記念で総務大臣表彰を受賞
平成20年4月	第6回かがわ21世紀大賞を受賞
6月	むれ源平まちづくり協議会が『地場産業・地域資源を活かした循環型ローカルコミュニティの構築プロジェクト』により「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業に選定
平成20年度～	「JAPAN石あかりコンテスト」により全国の石材事業者に対して情報発信



地域資源を活用したイベント



シンポの開催

統計データ

- 来訪者数 平成17年 30千人 平成18年 50千人 平成19年 80千人 平成20年 86千人
- 出展作品 平成17年 100点 平成18年 160点 平成19年 210点 平成20年 260点
- 設立当初に比べて様々な数値の伸びが発生
- 運営ボランティア登録数 20人程度 → 100人超 史跡ガイド 2名 → 6名 石あかりガイド 2名 → 10名
- 石あかりのデザイン募集（他地域応募数） H19は100点程度 → H20は200点超

地域づくりのノウハウ

（住民協力について）

課題 地域の生活道と庭先を約二ヶ月に渡りお借りする事業であり、地域住民の皆さんのご理解とご協力が頂けるか懸念された。

解決策 事業説明会や訪問の繰り返しと、以前（平成15年）より取組んできたまちづくり協議会の活動のおかげで、数多くの応援を頂き住民全体から理解と協力を頂けた。

（住民の積極的な参加について）

課題 一部の関係者に留まらない、地域全体が参加した行事となるか。

解決策 史跡を案内するサインフラッグ、ガイドマップ、史跡ガイド、石あかりガイド、石材モニュメント、石あかりの制作・設置、石あかりロードの運営など、全てにおいて地域住民の参画参加をテーマに展開してきた。サインフラッグのデザインは地元のデザイナー、文字は地元の書道家、染色は地元の染色家による共同制作、また設置は地域の老人会の皆さんによる竹細工を駆使したポール作りなど、地域の多大なご協力を頂き地域の重要な行事と成長している。

また、住民が持続的に参画できるように実行委員会を分散化し、全体企画は実行委員会、石あかりの募集と販売は石材組合、事業の

賑わいづくりとボランティア企画はまちづくり協議会が担当して得意分野で活動することにより参画者の拡大を図り、住宅ハウスメーカーや他産業とのコラボレーションにも挑戦してコラボ展示企画を実施。

（費用負担について）

課題 電気料金の負担をどう処理するか。

解決策 金銭的に厳しい中開催した石あかりロードであったが、あかりを灯す電気料金は、作品を置かせて頂く沿道の皆さんによりご負担して頂いている。

（経年的な運営経費確保について）

課題 実行委員会制で運営されており経費確保が一番の課題となっている。

解決策 事業費のほとんどを行政に委ねることなく広告収入などで確保している。平成20年度は特産品開発に取組み、自主財源の確保にチャレンジしている。



地域住民が運営に参加

お問い合わせ

むれ源平石あかりロード
実行委員会

TEL : 087-845-2446

URL : www.ishiakari-road.com

久留米 【くるめ】



- 散策用マップ作りに地域住民が参加することにより、住民が地域のお宝を発掘、地域の魅力を再発見。



「久留米ほとめき歩き」参加者

取組概要

ほとめき歩きでゆっくり散策、最後にちょっとおもてなし～「歩きたくなるまち久留米」の推進

久留米市は平成17年2月に周辺4町と合併し、豊かな自然と歴史、文化芸術、伝統工芸等々の多様な観光資源を持つ30万都市となり、また平成23年春には九州新幹線の全線開通によって新幹線久留米駅の開業が予定されていることから、久留米観光・コンベンション振興基本計画が策定されている。市では、3つの観光まち像（①歩きたくなるまち久留米、②ほとめきのまち久留米、③元気になれるまち久留米）の実現に向け、まち歩きを主体とする観光地づくりを目指し、観光による交流人口の増加、地域の活性化を図るため、「久留米歩きたくなる観光地づくり事業」に取り組んでいる。

- ① 地域住民と共に地域資源を発掘しながら散策用マップを作成
- ② 地域住民による来訪者へのおもてなしができるようガイドを育成
- ③ 「久留米ほとめき歩き」の定期的な開催

※ 「ほとめき」とは、筑後地方の方言でおもてなしの意味です。

■これまでの経緯

JR久留米駅から耳納北麓エリア（JR久大本線）を対象とし、歩きたくなる道づくりを検討し、平成18年度にほとめき歩きのモデル地区として、久留米市草野町、同市田主丸町（山苞の道）において、地域住民とマップづくりを実施。地域の魅力を地域住民が誇れるような取組として、ほとめき歩きを実施し、何気なくとおり過ぎてしまっていた道をゆっくり地域住民のガイドによって散策し、最後にはちょっとしたおもてなしを実施し、参加者からは大好評であった。

平成19年度は、久留米市内中心部へエリアをうつして同様な取組を実施し、地域の店を活用して自然豊かな草野、田主丸地区とは違うおもてなしを実施するとともに、継続地区の春、秋開催に向けた取組を行った。

平成20年度は、さらに久留米市内中心部の日吉地区にて取組んだ。



■統計データ

- 参加者数 ①田主丸地区441人 ②草野地区565人 ③中心市街地地区（荘島・南薫・篠山・日吉）207人
計 1,213人（平成18年～平成20年）
※①、②は平成18年度取組地区 ※③は平成19・20年度取組地区

🗨️ 地域づくりのノウハウ

課題 「久留米歩きたくなる観光地づくり事業」を取組むための地域住民の確保

解決策 校区コミュニティ組織を活用し、地域住民へ呼びかけを行った。

課題 地域の魅力に気づいてもらうための意識改革

解決策 いずれの地域も「この地域には何の魅力もない」と言われる地域住民の方が多く、地域住民と一緒に散策するためのマップづくりを行う過程で、普段は何気なく歩いていた道にはいくつものお宝資源（歴史、名所、旧跡、町並み、自然、文化、習慣、歩いて見える「ちょっとした看板、風景」やうんちくを語ってくれるお店の店主や地元の方など）を発見することができ、自分の住んでいるところの魅力に気づいてもらうことが出来た。

課題 ガイド経験のない地域住民を活用したボランティアガイドの育成

解決策 地域の魅力を紹介する「ほとめき歩き」では、今までガイドの経験や人前で話ることがない地域住民を活用しガイドを行うため、ボランティアガイドの心得として、一概に歴史や由来だけを紹介するのではなく、自分とまちのかかわりや日常生活文化を自分の言葉で伝える「まち物語」を紹介するようにした。

課題 参加者がリピーターとして再度訪れてもらうための仕組みづくり

解決策 参加者が単に散策をして帰るのではなく、また来たいと思えるように地域住民と交流が出来るよう、説明するポイントによっては、そこに住んでいる方（商店の店主、住職など）に説明してもらったり、休憩ポイントではおもてなしを通じ参加者とボランティアガイドとの交流を行う仕組みづくりを行った。



お問い合わせ

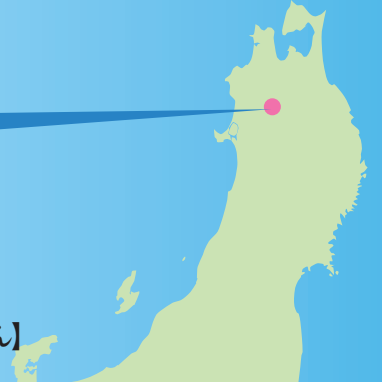
財団法人久留米観光コンベンション
国際交流協会

TEL：0942-31-1717

URL：http://www.kttnet.co.jp/kurume-convention/

小坂鉱山・康楽館

【こさかこうざん・こうらくかん】



- 町営として甦った日本最古の現役芝居小屋
- 一帯を明治期のイメージで統一することにより、観光資源としての価値を増大



日本最古の現役芝居小屋「康楽館」

取組概要

明治の香りただよう日本最古の芝居小屋「康楽館」の活用

国内初の黒鉱自溶製錬の成功と露天掘り方式の採用により飛躍的な発展を遂げた小坂鉱山。康楽館は、その厚生施設として誕生。以来、歌舞伎や新劇、映画などを盛んに上演・上映してきたが、建物の老朽化と機能の低下、さらにカラーテレビの普及などにより昭和45年頃に一般の興行は中止され、ほとんど使用されなくなった。

しかし、町内外の多くの人々の修復・保存を求める声により、昭和61年に町営として甦り、現存する日本最古の現役芝居小屋として新たな歴史を刻み始めた。

平成2年度からは、煉瓦歩道や街路灯を明治期のイメージで統一的に整備。また、隣接地に、近代洋風建築の特徴を残す旧小坂鉱山事務所の移築復原のほか、小坂鉱山病院記念棟や洋風園舎・天使館の改修を行う。康楽館は、平成14年に国重要文化財として指定を受けた後も、「活用されてこそ文化財」という視点から、「常設公演」や人気役者による「歌舞伎大芝居」が上演され、多くの観光客が訪れる。

これまでの経緯

- 明治43年 小坂鉱山の厚生施設として誕生。こけら落しは、大阪歌舞伎の尾上松鶴一座の公演。
- 昭和45年 老朽化とテレビの普及に伴う舞台演劇や映画の衰退により一般興行中止。
- 昭和60年 同和鉱業株式会社が小坂町へ「康楽館」の土地・建物を無償譲渡。
- 昭和61年 秋田県指定有形文化財に指定。
- 同年7月 再開館。翌日初演の常設公演は大江戸つるぎ太鼓。
- 昭和63年 「康楽館友の会」結成。
- 平成2年 康楽館が面する通りを「明治百年通り」と位置付け、明治期のイメージで统一的に整備。
- 平成13年 まちづくり総合支援事業により、康楽館の隣接地に近代洋風建築の特徴を残す旧小坂鉱山事務所を移築復原（明治38年創建）。また同事業により、近代洋風建築の特徴を残す、小坂鉱山病院記念棟（明治41年創建）と洋風園舎・天使館（昭和7年創建）を修復。
- 平成14年 小坂鉱山事務所とともに国の重要文化財に指定。
- 平成16年 「フラワーボランティアの会」結成。
- 平成19年 経済産業省により、小坂鉱山事務所等とともに近代化産業遺産として認定。



多くの観光客で賑わう康楽館



常設公演の様子



常設公演の様子

統計データ

○観光入込客数（小坂町）	平成15年1,580千人	平成16年1,480千人	平成17年1,440千人	平成18年1,410千人	平成19年1,310千人
○宿泊客数（小坂町）	平成15年 170千人	平成16年 140千人	平成17年 170千人	平成18年 170千人	平成19年 130千人
○内康楽館への入込客数	平成15年 97,921人	平成16年 90,515人	平成17年 85,662人	平成18年 83,683人	平成19年 81,962人

地域づくりのノウハウ

（昭和61年 再開館までの経緯）

課題

- ・県内でも前例がないことであり、町民も文化財という認識が薄くなかなか理解を得られなかった。補助事業もなく修復や運営のための財源確保にも苦労した。
- ・「活用なくして保存なし」という方針のもと、観光活用の方策を探るとともに、知名度を高めるための活動を、修復と平行して一から進めなければならなかった。

解決策

- ・修復については、町単独事業として実施したが、運営費については県補助・同和鉱業株式会社からの寄付・町積立金のほか、一般の方々に寄付を募り運営基金を設けた。
- ・常設公演、歌舞伎公演の誘致や町職員によるキャラバン隊を実施し誘客を図った。また、「康楽館友の会」（当初は「康楽館を守る友の会」）が結成され、愛護ボランティアやスタッフとして協力するほか、康楽館芸能フェスティバルを主催している。

（平成2年以降 康楽館周辺の整備）

課題

- ・当該地域の多くが鉱山用地であったが、民有地もあり店舗・住宅の移転を伴うものとなった。また、各補助事業の整合性を図ることに苦心した。
- ・風景が一変したことで地域住民や出身者から違和感を訴えられた。また近代建築物の保存に多額の経費が投じられることに、少なからず批判もあった。

解決策

- ・康楽館友の会による清掃ボランティアのほか、フラワーボランティアの会が結成されたことで、地域住民自らの手で「明治百年通り」の愛護活動に取組もうという意識が育ってきた。
- ・「明治百年通り」に洋風建築が建ち並んだことで、近代化産業遺産の町として内外から注目を集めるようになり、通りそのものが町のシンボルとして、地域住民の間にも定着してきた。

お問い合わせ

小坂町産業課観光商工班

TEL：0186-29-3908

URL：<http://www.town.kosaka.akita.jp/>

地域資源を活用した新たな取組

出雲国神仏霊場

【いずものくにしんぶつれいじょう】

- 20の神社仏閣が神仏や宗派を越えて連携、ネットワークを形成
- 神仏霊場の設立は我が国で初めて



出雲の社寺を巡る参拝客

取組概要

ご縁の道 心の旅

出雲の国「社寺縁座の会」とは、島根・鳥取両県の二十社寺の神社仏閣が神仏や宗派を越えて連携し、出雲の国に古くから残る、人と人の「ご縁」を尊ぶ心、「和」の心の大切さを世界に向けて発信しているという趣旨により設立された会である。神社仏閣が連携し、このような神仏霊場を設立したのはわが国で初めてのことである。出雲の国とは「出雲神話」の舞台となった島根・鳥取両県にまたがる広域のエリアであり、これはくしくも現代の文化経済の県境交流エリアと同一である。出雲国神仏霊場への巡礼が「山陰文化観光圏」という現代の広域連携の精神的バックボーンとして、美しい日本人の心を伝え、文化、風土、経済の振興と活性に寄与したいと考えている。また、希望者には巡拝の途中に講話（法話）、坐禅、写経、みそぎでの、基本的な参拝マナーの他、公序良俗、現代社会から失われつつある古き良き日本人の心、伝統文化等を伝える活動も行っている。

これまでの経緯

- 平成14年～16年 主要五社寺、学識経験者、経済人、文化人などで社寺連携に取り組む
- 平成16年12月 出雲の国「社寺縁座の会」結成、わが国で初めての「出雲國神仏霊場」巡拝を提唱
- 平成17年4月 出雲大社にて、第一回神仏合同祭事・世界平和祈願祭を開催（1,000名以上が参加）
- 平成18年4月 清水寺にて、第二回神仏合同祭事・世界平和祈願祭を開催（数百名以上が参加）
- 平成19年10月 美保神社にて、第三回神仏合同祭事・世界平和祈願祭を開催（数百名以上が参加）
- 平成20年4月 須我神社・峯寺にて、第四回神仏合同祭事・世界平和祈願祭を開催（数百名以上が参加）



統計データ

○推定巡拝者数（二十社寺を巡拝した人の数）

平成18年…5,000人 平成19年…5,000人 平成20年…4,000人

○合同祭事参加者数

平成17年4月 出雲大社（1,000人以上） 平成18年4月 清水寺（数百人以上）

平成19年10月 美保神社（数百人以上） 平成20年4月 須我神社・峯寺（数百人以上）

地域づくりのノウハウ

[検討段階]

課題 「神仏霊場」という全く新しい取組や概念を如何に伝え広めるかに苦心した。

解決策 国民的な精神文化啓蒙活動と、地域文化経済振興活動とのバランスをとることに重点を置き、理解を得た。

課題 他業界との連携が不足しており、地域全体の取組となっていなかった。

解決策 計画段階から、積極的に行政や民間の意見を取り入れるために、諸会合や調査活動を共同で行ってきた。

解決策 島根県、鳥取県、周辺市町村、旅行業者、出版業者、地元宿泊業者などへのPR活動や参画依頼を精力的に行い、少しずつではあるが理解と協力を得ることができている。

[取組実施段階～取組実施後]

課題 地元での認知度が低い。県外から期待を持って来るも、情報が少なく、がっかりしたというケースがある。

解決策 地元へのポスター掲示、公民館や各種団体への巡拝PRチラシの配布をおこなう。

お問い合わせ

出雲の国「社寺縁座の会」
事務局（一畑薬師内）

TEL：0853-67-0111

URL：<http://www.shinbutsu.jp/>

ハットウ・オンパク

【はっとう・おんぱく】

- 地域資源を活かして多彩な体験交流型プログラムを提供する取組の草分け
- 最近では日本各地にノウハウを伝授



体験型交流イベント「ハットウ・オンパク」

取組概要

地域固有の資源を活かしたサービスや商品の開発～事業化を支援する体験交流型イベント「別府八湯温泉泊覧会（以下、ハットウ・オンパク）」の取組を通じて、別府地域にウェルネス産業を興し、地域の持続可能な発展を目指している。

観光客の減少により疲弊した地域経済の建て直しの為には、従来型の観光モデルに縛られない新しいスタイルの産業興しが必要と考えた。

「ハットウ・オンパク」は、地域の資源を活かした多彩な体験交流型プログラムの提供を通じて、地域の魅力の再発見と地域資源を活かしたサービスや商品の開発を促す取組である。「ハットウ・オンパク」の開催期間（おおむね1月弱）中には、100種を超える地域資源を活かした体験交流型プログラムが200を超える地元事業者の連携の下で展開される。この取組を通じて、多くの事業者が新しいサービスのテストマーケティングや顧客基盤の充実を図りながら、サービスの日常化に向けて変化していくことになる。

■これまでの経緯

- 平成13年に第1回を開催してから、概ね春秋開催ペースでこれまでに14回を開催している。地域の散策プログラム、温泉などの地域資源を活かした健康増進や食関連のプログラム、メンタルケアやエステなどの癒しのプログラム、周辺地域へのお出かけ・エコツアープログラムなど、延べ1,000種以上が開催され、新たな体験型プログラムの開発や人材の育成を行ってきた。
- 「ハットウ・オンパク」への参加を通じて、地域の散策ガイドツアー、食関連の事業、エステやメンタルケアなど癒し系事業など多彩な体験型サービスが日常化につながり、地域内外からの顧客の誘致に貢献している。以下に、オンパクへの参加を通じて発生した新しいサービスや事業を列記する。
 - 別府八湯ウオーク…ガイド人材の育成によりいくつかのコースが日常化した。年間1万人を超える観光客を集めている。
 - 地獄蒸し屋台…温泉の噴気を活かした伝統の調理法「地獄蒸し」をカジュアルに楽しめる屋台
 - 地獄蒸し豚まん…地獄蒸しにより製造する豚マンが鉄輪地域の名物土産となった
 - ファンゴティカ…別府の温泉泥を使ったエステプログラム
 - 各種エステおよびメンタルケアプログラム…オンパクへの参加を通じて顧客を獲得し、事業の日常化、独立、ホテルへの進出などに結びつき、観光客向けにサービスを提供している。
 - B級グルメ関連…メディアにも多く取り上げられることで食情報を発信。多くの観光客が別府の中心市街地の、とり天や冷麺などのB級グルメを楽しみだした。
 - など、多数のサービスの日常化、事業化へ繋がる
- 「ハットウ・オンパク」には、観光事業者以外にもまちづくり団体、地場商店や企業、そして個人の事業者が極めて多く参加している。一度のオンパクの開催には200を超えるこれらの事業者がそれぞれに連携をして、個々の問題解決に当たっている。また、プログラムに参加する地元住民のリピーター顧客会員「オンパクファン倶楽部」も5,500名を超えており、各事業者の潜在的な顧客層となっている。このような事業連携プラットフォームが構築されたことで、事業の持続的な発展と個々の事業者への支援力の向上に繋がっている。
- 「ハットウ・オンパク」関連の取組は、開始以来、新聞やテレビなどのメディアで極めて活発に取り上げられており、別府の地域情報の発信に大きく貢献している。
- また、近年では、地域資源を活かした小規模事業育成の支援機能が認められて日本の各地にそのノウハウを移転する「オンパク・ジャパン」事業も開始している。
- 「オンパク・ジャパン」事業により、集合型の研修やハンズオン支援を通じて全国10箇所の地域の「ご当地オンパク」事業を支援している。支援先の地域は、別府で年月をかけて磨いてきた事業ノウハウやITシステム基盤を手に入れる事ができるので、別府と同様の成果がより短い期間、少ないコストで得られる事が可能になっている。この活動を通じて、各地で別府と類似の成果が出てきている。



■統計データ

- 「ハットウ・オンパク」イベントを一度開催することによる直接的な効果
 - 参加者数3,500人（別府市内50%、市外50%）一次消費金額約2,000万円
 - （この数字は、体験プログラムの開発・人材育成を目的とした場合は、むしろ過大であり、もう少し規模を小さくしたいと考えている。）

🗨️ 地域づくりのノウハウ

【検討段階の障害】

課題 類例が少なく、事業趣旨が正確に伝わりにくかった

解決策 見せることで理解を得ていくしかないので、本格的な事業着手前に小規模な取組を手弁当でやった。

【取組実施段階の障害】

課題 多種多様なプログラムを沢山行うので、運営・企画人材の育成が必要

解決策 現場運営を任す事で人材の育成を図った。事業構造そのものの特徴だが、オンパク事業な小規模なイベントの集合体なので、個々のイベントで失敗しても全体の致命傷にはなりにくい。従って現場の運営や企画人材を育成する際には大胆に現場の運営を任せてしまう事ができる。任された人材は成長していくので、回数を経る毎に

運営・企画スタッフは成長し、現在では、阿吽の呼吸で意思疎通が図られるようになっていく。

【取組終了後の障害】

課題 オンパク事業そのものは収益事業化しにくいので、別途、収益源を確保して、運営の持続性を確保する必要があった。

解決策 地域再生の取組であるオンパク事業が成果を出すには地域からの資金拠出と相応の時間が必要。立ち上げ当初は行政からの資金的な支援を頂いたが、補助金は三年間で終わってしまう。NPOオンパクでは、研修団やツアーの受入れを行う着地型エージェント事業、地域ガイド本の出版事業、地域資源を活かしたサービスの商品化企画の受託業務、オンパク・イベント運営ノウハウの移転事業など、多彩な収益事業を行いながら運営の持続性を確保した。

お問い合わせ

NPO法人ハットウ・オンパク事務局

TEL : 0977-22-040

URL : <http://www.onpaku.jp>

長崎さるく

【ながさきさるく】



- まち歩きによる観光振興の先駆け
- 住民参加による企画やガイドにより、住民の地域に対する誇りを再認識



「長崎さるく博」参加者

取組概要

日本ではじめてのまち歩き博覧会～長崎さるく博'06

メインテーマ：知らなかった長崎の体験と発見

サブテーマ：すてきに・ちてきに・げんきに

観光客数の減少傾向が続き、その巻き返しに苦慮するなか、道路、施設などの複数の大型公共事業が平成18年の春に完了するというチャンス到来。この年を、観光都市・長崎の新たな発展を目指すスタートの年にするべく、3か年の行動計画「長崎市観光2006アクションプラン」を策定。“まち活かし・ひと活かし”を基本理念に、“住みよいまち”と“観光客にとって魅力的なまち”の融合を目指した。

長崎の強みである“本物の資源”“個性的な文化”“交流を受け入れる素地”を活かすことができ、特徴的なまちの形態にも合った“まち歩き”に着目。まち歩きが楽しくなる仕組み・仕掛けづくりと、長崎の新しい楽しみ方の情報発信に取組むなかで、“市民主体の”“一過性でない”“3か年で拡大する”イベントとして「長崎さるく博'06」を開催。まち全体をパビリオンと捉え、特段のハード整備は行わず、市民のガイドによるまち歩きを中心とした博覧会を開催。212日間に、100を超えるコース・テーマのまち歩き等を実施し、約1,000万人が参加。

これまでの経緯

- 平成16年2月 長崎市観光2006アクションプラン策定
 4月 長崎市2006プロジェクト推進本部設置
 長崎市2006プロジェクト推進委員会設立（のちに「長崎さるく博'06推進委員会」へ名称変更）
 長崎市観光2006アクションプラン第1次実施計画策定
 6月 公式ホームページ開設
 8月 シンボルマーク、マスコットキャラクター決定
 長崎さるく博'06第2次実施計画策定
 10月 2004年プレイベント開催（10/23～11/23）
 32日間開催／通さるく4コース／学さるく4テーマ／長崎体験3テーマ／
 実施要領（予約方法・ガイド手配・配置、定員・時間等案内要領、参加費等）検証
- 平成17年7月 2005年プレイベント開催（7/30～10/16）
 79日間開催／通さるく15コース／学さるく15テーマ／長崎体験5テーマ／参加料の見直し／ホーム
 ページから予約できるシステムを導入／夏場対策の検証
 9月 長崎さるく博'06第3次実施計画策定
 10月 公式ガイドブック発行
 「長崎からの手紙」キャンペーン開始
 市内全自治会への説明会開始
 12月 100日前イベント実施
 「長崎さるくマップブック」「長崎通さるく手形」販売開始
- 平成18年 長崎さるく博'06開催（4/1～10/29）212日間開催／遊さるく42コース／通さるく31コース／学さるく
 74テーマ／長崎体験9テーマ／19の記念イベント／26のタイアップイベント等の実施
- 平成19年 長崎観光の柱として「長崎さるく」スタート
 平成21年 長崎さるく幕末編開催（4/23～11/23）



統計データ

○宿泊者数	平成16年	2,250千人	平成17年	2,310千人	平成18年	2,530千人
○観光入込客数	平成16年	4,930千人	平成17年	5,390千人	平成18年	5,700千人
○年間消費額	平成16年	680億円	平成17年	722億円	平成18年	777億円
○長崎さるく博'06の効果（平成18年4～10月） 観光客数355万人、宿泊客数151万人、経済波及効果865億円（直接及び1～3次波及効果）						

地域づくりのノウハウ

課題 まち歩きのシステム

解決策 先進地を参考に長崎方式のシステムを構築し、プレイベントで検証・改善を行い、現システム確立

課題 市民参加

解決策 まち歩きコース設定、マップづくり、イベント企画・運営等の中心となる「市民プロデューサー」を公募

課題 ガイド

解決策 市民公募し、「さるくガイド」を養成（登録者325人）

課題 告知

解決策 公式ガイドブックに一筆添えて友人・知人に送る「長崎からの手紙」への協力を市民に呼びかけ、約5万通を送付（郵送料は推進委員会負担）

課題 夏場対策

解決策 昼間の実施回数を減らし、早朝・夕暮れのまち歩きを実施

課題 まち歩き環境

解決策 飲食店等の協力により、トイレ・休憩に利用できる「さるく茶屋（118か所）」を設置／地元住民の協力により、湯茶接待所「さるくホットステーション（24か所）」を設置
 ※平成19年度、古写真などを掲載した説明板（167か所）を設置

課題 まち歩きの魅力アップ

解決策 老舗店舗などの協力によるまちかど博物館「さるく見聞館」の設置／まち歩きの途中で踊りや音楽などのパフォーマンスに遭遇する「演出イベント」の実施／スタンプラリーの実施

お問い合わせ

長崎市さるく観光課

TEL：095-829-1314

URL：<http://www.saruku.info>

4. 地域資源を活用した新たな取組(参考編)



地域資源を活用した新たな取組

北海道遠別町

1 遠別町 [えんべつちょう]

■ひらめ底建網オーナーin遠別実行委員会（事務局 遠別漁業協同組合）
TEL.01632-7-2235 URL <http://rumoifan.net/hirame/2009/index.html>



あなたも高級天然ひらめ漁の網元に「ひらめ底建網オーナーin遠別」

遠別漁港における底建網のひらめは活魚出荷の代表的な魚であり、底建網で漁獲することにより傷を付けずに生きたままの出荷を可能にしている。しかし、地域特産品のブランド化が進む中で遠別の知名度は未だ低いままである。

そこで、遠別の漁業を全国発信し、遠別町の知名度を上げることを目的として、平成20年6月21日にひらめの底建網を活用し、漁港の味覚を楽しんでもらうイベントとして「ひらめ底建網オーナーin遠別」を開催した。漁獲されたひらめをオーナーで分配するもので、当日は全国からオーナーが集まり、見学船に乗って沖合約1,500メートルに沈めた底建網漁の醍醐味を感じてもらい、イベント会場ではホタテ釣り、ひらめのおろし方講座や、シーニックバイウェイ（萌える天北オロロンルート）の活動団体による管内特産品や「道の駅弁」の直売等を楽しんだ。

地域資源を活用した新たな取組

石川県穴水町

2 穴水町 [あなみずまち]

■株式会社和倉穴水店 江尻屋
TEL.0768-52-0911 URL <http://okuichi.net/ejiriya/>



能登の冬の味覚“能登かき”の『水揚げ&殻剥き体験』

日本海側最大の牡蠣の産地である能登半島七尾湾に面する穴水町では古くから牡蠣の養殖が行われてきた。過疎化が急速に進む中、穴水町の地域資源である牡蠣をPRして地域に賑わいを創出しようという目的で始まった「穴水まいもんまつり」は平成21年で24年目を迎え、“冬の陣”かきまつりでは、牡蠣のフルコースを求め県内外から多くの食通が訪れるようになり、特別イベント『雪中ジャンボかきまつり』は総延長150mの巨大炭火コーナーで焼き牡蠣を堪能するために2万人が来場する奥能登でも有数のイベントに成長した。

近年、体験型観光が脚光を浴びるようになり、新たな取組として「牡蠣の水揚げ&殻剥き体験」を企画。

地域資源を活用した新たな取組

福井県若狭町

3 若狭町 [わかさちょう]

■社団法人若狭三方五湖観光協会
TEL.0770-45-0113 URL <http://www.wakasa-mikatagoko.jp/>



大漁の魚に感動！大敷網体験と漁業体験学習

各集落に宿泊していただいたお客さんに漁業のダイナミックさ、大漁の様子を見てもらうことで、より深く若狭町の魅力を感じてもらおう。約2時間かけて漁の様子を見学する。網を上げる時は感動まちがいなし。天気がよければ朝日が昇るのを見ることもできる。

また、教育旅行向けの取組として、町内の民宿が比較的閑散となる5～7月の経済効果を狙い、中学生を対象とした漁業体験学習を受け入れている。訪れた中学生が、再度家族を連れて来たり、本人が大人になった時に来てもらうことも狙っている。

定置網を見学する「大敷網体験」、釣り体験、シーカヤック体験、干物作り体験、磯観察、などを組み合わせている。主に来ているのは、岐阜県の中学校である。宿泊は町内の民宿であり、鮮魚を使った料理はもちろんのこと、経営者家族との交流も好評である。

地域資源を活用した新たな取組

静岡県伊東市

4 伊東温泉 [いとうおんせん]

■伊東温泉旅館ホテル協同組合・一般社団法人伊東観光協会
TEL.0557-37-6105 URL <http://www.itospa.com/>



潮風と海風浴を満喫！「伊東温泉地引網体験」

釣り舟業者が独自で実施していたものを、エージェンツキャンペーンの付加サービスとして取り入れたところ、参加者に大変好評であったため、健康回復都市宣言を行った市とも協力し、5・6月の日曜日、伊東温泉に宿泊のお客様を対象に実施している。着地型として、自然豊かな伊東温泉の代表的な観光資源である海での体験型事業。非日常体験を大人から子どもまで幅広く楽しむことが可能。

地域資源を活用した新たな取組

佐賀県太良町

5 太良町 [たらちょう]

■太良町遊漁船クラブ
TEL.0954-67-0098



貴方も漁師になって有明海を丸ごと体験してみませんか！

この取組は、太良町立小学校2校の子もたちが、平成7年度から太良町遊漁船クラブの協力により、有明海で伝統的に行われている漁法である刺し網漁を体験。1年間通して取組んでいる「森から海への総合学習」の一環である『海の体験学習』と題して行っている。

この体験活動では、事前に仕掛けた刺し網を、遊漁船数隻で沖に出てクラス全員の力を合わせて網を手繰り寄せ、網にかかったクチゾコやワタリガニ等を自らの手ではずし、水揚げした魚介類を子ども達の手でおろし、魚料理をつくる体験活動である。

6 あまべ渡世大学 【あまべとせいたいがく】

■佐伯ツーリズム推進協議会
TEL.0972-22-3942 (佐伯市観光課)



五感で体感！日豊海岸の海・山・里！

ウニ割り体験や真珠の核入れ体験などのブルーツーリズムを体感できるあまべ渡世大学が平成19年6月に開校し、同年12月末までに約3,100人の方が受講した。佐伯ツーリズム推進協議会では、あまべ渡世大学のカリキュラムや他の地域活動グループと連携し、農山漁村における、小学生の長期宿泊体験の受け入れ体制の整備を図り、平成20年度は2校95名を受入れ、地域産業と教育の振興に寄与した。

7 置戸町 【おけとちょう】

■置戸町森林工芸館
TEL.0157-52-3170 URL <http://www.town.oketo.hokkaido.jp/kougeihp/index.htm>



外国人に人気 オケクラフト（木工品）

核となる観光・宿泊施設がないことから、観光バスにトイレ休憩に立ち寄ってもらおうと、森林工芸館をコースに加えたところ、町の名産である木工品が、シンガポール人観光客のお土産として人気となった。

8 然別湖 【しかりべつこ】

■然別湖コタン実行委員会（然別湖ネイチャーセンター）
TEL.0156-69-8181 URL <http://www.nature-center.jp/>



しかりべつ湖の上に美しい氷の村「しかりべつ湖コタン」

昭和55年に若者たちが北国ならではの楽しみを発見しようと然別湖上に氷の家（イグルー）を作成。この氷の家は、春になれば自然に溶け、廃棄物による湖水汚染も心配ない遊び心満点の建造物。その後、地元の子ども達も参加して注目され、NHKのゆく年くる年で紹介されて一躍全国区に。湖上露天風呂やアイスバーも開設され、北海道の冬の風物詩として海外からも注目されるイベントに育っている。

北海道観光が夏に集中する中で、冬期間の集客の柱となり、来訪者を活発化させた功績は大きく、期間も1月20日～3月下旬と長いことから、経済効果の高いイベントとして評価されている。

9 土人形の里 信州中野 【つちにんぎょうのさと しんしゅうなかの】

■中野市商工観光課
TEL.0269-22-2111 URL <http://www.clay-doll.jp>



伝統技法で作られる土人形制作体験等を通して土人形の里づくりを推進

毎年3月31日から4月1日に開かれる中野ひな市は全国的に有名で、中野土人形の展示即売会には全国からファンが訪れている。

中野土人形や全国の土人形を展示する日本土人形資料館を開館し、土人形の絵付け体験などの事業を展開し、知名度向上の取組を行ってきた。

土人形を身近に感じ、土人形を通じた市民交流を図るため、市の「土人形の里づくり事業」の一環として、絵付けコンテストを開催している。

10 北海道スキープロモーション協議会 【ほっかいどうすきーぷろもーしょんきょうぎかい】

■北海道スキープロモーション協議会（事務局 社団法人北海道観光振興機構）
TEL.011-231-0941 URL <http://www.skiing-hokkaido.com/index.html>



北海道のスキーアクティビティを世界に発信

参画する団体が協働しオール北海道としてウインタースポーツやスノーアクティビティを通じて外国人観光客の誘致推進に取組み、北海道が誇る「Powder-Snow」を世界に発信することで世界的なスキーリゾートとして「北海道ブランド」の確立を目指す。

11 新上五島 【しんかみごとう】

■新上五島町観光物産協会

TEL.0959-42-0964 URL <http://www.shinkamigoto.org/>



体験型観光を通して行う、地域と人の活性化

新上五島町では、恵まれた大自然を舞台とした漁業体験や農業体験などの体験型観光を実施している。しかしながら、他地域との競合も激しくなり、今後は、この地ならではの地域資源を活かした本物志向の体験プログラムを開発することが求められている。そこで、ニーズの多様化にあわせ、親子で楽しめる気軽な体験プログラムの開発や本格的な磯釣り体験など、マニアをターゲットとしたプログラムの開発にも力を入れている。

12 九州三湯物語

■九州三湯物語全体実行委員会

【きゅうしゅうさんとうものがたり】 TEL.0954-23-9237(武雄市観光課) URL <http://www.kyusuyusanto.net/>



人・食・文化でつながる三つの温泉地～由布院・杖立・武雄～

九州の三温泉が、観光情報・イベントなどの共同PR、旅行商品の造成等で連携。同時に、それぞれの観光力のアップ（地力の底上げ）を目指し、人（一般市民、観光事業者、料理人等、老若男女）の交流や文化の交流によりお互いを比較し新発見し、自らを見直し、それぞれの魅力を磨き上げる。

13 流水接岸地域 【りゅうひょうせつがんちいき】

■オホーツク圏観光連盟

TEL.0152-45-1885

URL <http://www.okhotsk.org/news/eco2.html>



流水を守るとは、地球を守ること (Save the ice, Save the earth)

オホーツク圏の多様な生態系のゆりかごであるとともに、地域の重要な観光資源でもある流水の量は、過去100年で約40パーセント減少した。

流水トラスト運動は、流水減少の主たる原因とされる地球温暖化を食い止めて流水の回復を図るため、知床・網走地方の観光業界団体(オホーツク圏観光連盟)と網走支庁が平成19年12月から開始。

“流水を守るとは地球を守ること”をスローガンに、宿泊施設において冷暖房を控えめに設定するよう施設とお客様に呼びかけ、CO₂排出量を削減する取組として「旅ecoプロジェクト」を展開している。

14 いにしえ街道 【いにしえかいどう】

■江差町産業振興課

TEL.0139-52-1020 (内線322)

URL <http://www.hokkaido-esashi.jp/kankou/inishie/top.htm>



歴史を生かすまちづくり事業

江差町は、北前船とにしん漁で賑わい、北海道の中でも古くから商業の町として繁栄し、その当時の繁栄を色濃く残す歴史的建造物（問屋、商家、町屋、寺社等）が数多く残されている。この美しく貴重な景観を後世に永く伝え、歴史的資源を生かして活性化を図ること、また訪れる人に心の安らぎを感じることが出来るまちなみとして、平成元年に北海道戦略プロジェクト「歴史を生かすまちづくり事業」の「歴史を生かす街並み整備モデル地区」に指定され「いにしえ街道」の整備をすすめ、1.1kmに及ぶ情緒あふれる街並みに整備された。

15 蔵町モール 【くらまちもーる】

■奥州市江刺総合支所商工観光課

TEL.0197-35-2111(代) URL <http://www.city.oshu.iwate.jp/>



蔵

古くから北上川の水運に支えられ、交易の要衝として一時代を築いた江刺区市街地には、今でも百棟余りの土蔵が残されている。

中心市街地のひとつ中町地区では、平成2年に「蔵を生かした街づくり」をスタート。商店ばかりではなく一般の家庭も蔵風・和風の建物にし、統一感のある街並みづくりを進めてきた。平成10年には、商店街の再生を願う民間有志が設立した株式会社黒船が、商店街の核店舗となる「ガラス館」を、平成18年には、蔵を利用した飲食店である「蔵まち郷土食財館えびや」をオープンしている。また、平成21年には、市街地活性化の取組として、市や商工会議所が中心となって蔵まちに「屋台村」を整備した。

16 忍野 [おしの]

■忍野村地域振興課

TEL.0555-84-7794 URL <http://www.vill.oshino.lg.jp/>

富士山と農村景観・名水に恵まれた郷を守るため、村民が「美しいむら」づくりを実施

忍野村は、美しく荘厳な富士山を遠景に、富士山の伏流水による湖沼や河川などの自然の造形と、田畑やかやぶき屋根などの代表される人間の営みが近景として調和した、美しい風景の村である。日本の代表的な原風景としてたびたび紹介される忍野村の風景は、多くの人々の心をとらえてきた。

忍野村では、こうした富士山と農村景観が村民のかけがえのない財産であり、これを後世に継承していくことを目的に、良好な風景づくりを政策の柱に掲げ、村の景観保全のための取組を進めてきた。

特に、平成13年度に「忍野村まるごと庭園景観条例」や「庭園景観基本計画」を制定・策定し、統一的な建物外観や看板等の整備基準を示すなど、景観づくりの推進を図っている。

17 別所温泉 [べっしょおんせん]

■別所温泉観光協会

TEL.0268-38-3510 URL <http://www.bessho-spa.jp/>

素朴な人情と豊かな自然、歴史、温泉がおりなす「癒しの郷」別所温泉

別所温泉は、鎌倉時代に周辺の塩田平を本拠とした信濃北条氏（塩田北条氏）建立による国宝八角三重塔を有する安楽寺や、北向観音などの古い社寺仏閣が多いことから、「信州の鎌倉」と呼ばれている。

歩いて回れる範囲に、古いお寺が点在していることから、古寺めぐりマップの作成や、案内看板を設置。

別所温泉の歴史発掘や地場産の食材を利用した料理の開発など、更なる温泉地の魅力向上のため、平成20年7月2日、別所温泉地区が再生モデル事業の採択を受ける。同月30日、別所温泉地区魅力創生協議会を設置。現在、観光振興アドバイザーの助言を受け、同協議会において観光地再生プランを策定。平成21年度から同プランに基づき事業を実施中。

18 高山市 [たかやまし]

■高山市観光課

TEL.0577-32-3333 URL <http://www.hida.jp>

安心して一人歩き

訪れた観光客が誰でも安心して一人歩きできるように、日本語を含めた4言語で市街地の主要地点に誘導案内看板を設置している。また複数言語での散策マップの作成や、QRコードを利用した観光情報提供、バリアフリートイレの設置などにより観光地の充実を図っている。

19 ぶらりん号 [ぶらりんごう]

■喜多方市観光交流課

TEL.0241-24-5200 URL <http://www.city.kitakata.fukushima.jp>

喜多方観光にはこれが便利!! 主要観光地を巡るにはぴったりのレトロ調循環バス

多くの観光客がまちなかを散策する風景が見られる喜多方市。その観光客の散策の利便性を高め滞在時間の延長を図り、また、市民生活の利便性向上をも目的として、市街地中心に循環バス「ぶらりん号」が運行されている。環境にも配慮した天ぷら油で走るエコカーであり、乗ること自体にも魅力を持たせるためにレトロ調車両を使用。主要観光スポットを巡るまちなか散策の足にぴったりということと合わせて好評を得ている。平成20年度は4～11月の土日祝日を中心に運行。

20 ならまち

■財団法人ならまち振興財団

TEL.0742-27-1820 URL <http://www1.kcn.ne.jp/~narazai/>

民間主導、行政支援によるならまちの歴史的まちなみ保全活動

民間主導、市民のNPO組織で、奈良の古い町並みを保存しようともちづくりをおこなっている。

平成4年には、奈良市により財団法人ならまち振興財団が設立され、江戸末期から明治にかけての町家の面影を今に伝える壮大な取組が行われている。

21 御手洗まち並み保存地区
【みたらいまちなみほぞんちく】

■呉市産業部観光振興課

TEL.0823-25-3181 URL <http://www.kurenavi.jp>



安芸灘とびしま海道開通 大崎下島「豊町御手洗」～潮待ち、風待ち、港まちでおもてなし～

平成6年に御手洗地区が国の「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されたことを機に、住民あがりの町内の清掃・美化活動はもちろんのこと、御手洗を多くの人々に知ってもらうためにイベントの開催や情報発信を行ってきた。

平成20年11月に豊島大橋が開通し安芸灘四島（大崎下島、豊島、上蒲刈島、下蒲刈島）が陸続きとなり、安芸灘とびしま海道に乗って自動車での観光が容易になった。このことを受けて、観光客の受け入れ態勢の一層の充実を図るため、休憩所の設置や観光ガイドの募集と勉強会を実施している。

このような活動の結果、潮待ち・風待ちの港まちとして発展してきた御手洗の特徴である「もてなしの町」の中で「自分たちの町は自分たちでつくる」という気概、「歴史、伝統、文化を大切に、誇りに思う」という意識、「伝統、文化を継承していく」という意志が醸成された。

22 フィールドミュージアム

■松山市総合政策部坂の上の雲まちづくり担当部長付

TEL.089-948-6996 URL <http://www.city.matsuyama.ehime.jp/sakakumo/>



『坂の上の雲』のまち松山フィールドミュージアム

『坂の上の雲』ゆかりの場所や地域固有の資源が点在するまち全体を、屋根のない一つの博物館と捉え、回遊性の高い物語のあるまちづくりを行っている。

そのため、道後温泉本館周辺の道路をつかえ石畳の歩行者専用広場に整備したり、松山城と坂の上の雲ミュージアムを結ぶ、ロープウェイ街の景観整備を行ったことにより、休日の歩行者数が約3.5倍となった。

23 大川市 【おおかわし】

■肥後街道宿場町運営委員会

TEL.0944-87-2101（大川市インテリア課）



江戸から続く古い町並みを散策しながら伝統ある匠の技を楽しむ

今も江戸の町並みを残す小保・榎津町並み地区は、江戸時代は柳川藩と久留米藩の宿場町、港町として繁栄し歴史的町並みが形成された。近年、住民の町並みに対する意識が高まり、10年前からの地域住民によるイベント「肥後街道宿場を歩く」では、大川の職人による伝統工芸展示や造酢屋の酢蔵開き、スタンプラリー、行燈めぐり、欄間彫刻展など、多くの取組を肥後街道の数か所を開催場所に行っている。特に行燈めぐりは地元職人による手作りの行燈で、静かな、行燈がともる町並み散策は他で味わえない本物の雰囲気を感じることができる。

24 一の宮門前町商店街
【いちのみやもんぜんちょうしょうてんがい】

■財団法人阿蘇地域振興デザインセンター

TEL.0967-22-4801 URL <http://www.asodc.or.jp>



湧水を活用した商店街づくり

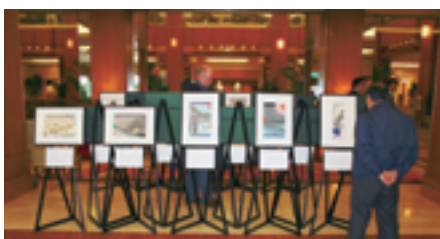
ゆっくり滞在して交流を楽しんでもらうために、豊かな水資源を活かして店先に「水基（みずき）」と呼ぶ氷飲み場を設置、それぞれに『菓恋水』など、管理しているお店にちなんだユニークな名前がつけられている。

また、各商店ではオリジナルの商品開発に取組み、熊本特産の馬肉を使用したコロケ「馬ロケ」、湧き水を使ったシュークリーム「たのシュー」や水出しコーヒーなどの新商品が開発され、水基巡りの魅力を大きく引き上げている。

25 日本橋 【にほんばし】

■NPO法人東京中央ネット日本橋美人推進協議会日本橋美人博覧会実行委員会

TEL.03-3553-5550 URL <http://www.nihonbashi-bijin.com/bijinhaku/>



「日本橋美人」「心も身体も美しく」をテーマに日本橋の街めぐり

「日本橋美人“Japan Beauty from Edo-Tokyo”」は江戸時代から続く伝統を身近に感じるにより培われた教養や品格、粋などの価値観を大切にする「心も身体も美しい」女性を総称する日本橋の地域ブランドで、「優」「粋」「知」「創」の四つの美で支えられている。

この美をテーマとして、平成21年秋に「江戸で彩る日本橋-第2回日本橋美人博覧会」が開催され、地域ブランド「日本橋美人商品」を紹介。日本橋を回遊して、江戸時代の文化を楽しみながら日本橋の奥深い魅力を味わってもらうほか、様々なイベントや街めぐり、スタンプ版浮世絵ラリーなどを実施。街ぐるみのおもてなしは、訪れた人々に絶賛された。



MEMO

A series of horizontal dashed lines for writing, spanning the width of the page.